

(大島郡笠利町万屋字下山田)

**位置と環境**

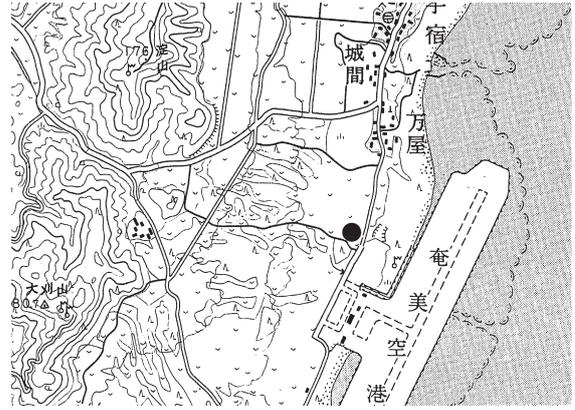
笠利町は奄美大島の中でも最北端に位置し、南北15km、東西約4、5kmの細長い半島をなしている。半島は南北にのびる高岳、大刈山、淀山等からなりほぼ中央を東西に分ける地形になっている。この最高峰の山で183.6m（高岳）である。笠利半島全体は大島本島の中でも比較的平地が多いのが特徴である。

万屋下山田遺跡は笠利半島東海岸のほぼ中央に位置する。遺跡南側には長浜金久遺跡群と北側には宇宿小学校構内遺跡、国指定史跡宇宿貝塚などが隣接する。下山田遺跡は旧期砂丘状に立地し、縄文時代から弥生時代、グスク時代までの遺跡が立地しており、この一帯は先史人達が生活しやすい環境にあったと思われる。

**調査の経緯**

現在の奄美空港が1988年（昭和63年）に開港する。奄美空港開港に向けた県道整備に伴う改良工事がすすめられた。それに基づき遺跡の確認調査が鹿児島県教育委員会によって行われた。

万屋下山田は3地点から遺跡の確認があり、発見順に第1、第2、第3、と名付けられる。下山田第1遺跡は砂採り工事でそのほとんどが昭和48年頃に破壊され、遺物が積み残された砂山から表採される。第2遺跡は1986年に笠利町教育委員会によって発掘調査が行われた。



第1図 下山田Ⅱ遺跡の位置

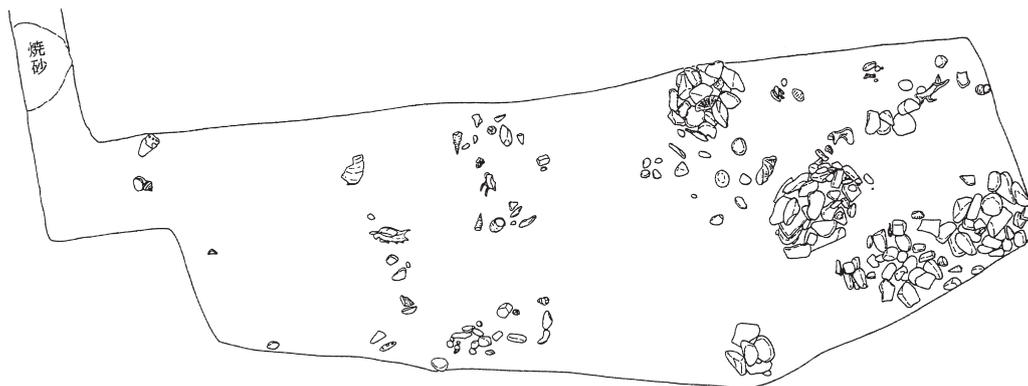
下山田第3遺跡は道路改良工事に伴い、1984年鹿児島県教育委員会によって発掘調査が行われている。その後1990年（平成2年）に道路工事に伴う土地買収を終えて追加調査が笠利町教育委員会によって行われている。

**遺構と遺物**

本遺跡は標高約10mの砂丘台地にあり、東側に傾斜している。傾斜部分に集石遺構が7基検出された。宇宿下層式土器、面縄前庭式土器、一湊松山式土器などが出土している。

集石は直径約1mの大きさをなしている。ほとんどが焼けており、土器や貝などの遺物も混入している。集石は砂丘の石灰質と灰が混ざりコンクリートのように固くしまっている部分もある。このような集石は宇宿小学校構内遺跡からも検出している。

遺物は土器、石器、貝製品、骨製品などが出土している。石器は貝製品にくらべて少ない。磨り石や



第2図 集石、遺物出土状況

敲き石，溝状を有する砥石などである。貝製品は取っ手のない研磨されたヤコウガイ製容器やオオツタノハ製のプレスレットなど多数である。貝小玉も多い。そのほかに貝製鏃などが出土している。骨製品ではイノシシ牙，鮫の歯，骨針などが出土している。

**特徴**

複合して出土した遺跡は宇宿小学校構内遺跡に類似する。

**資料の所在**

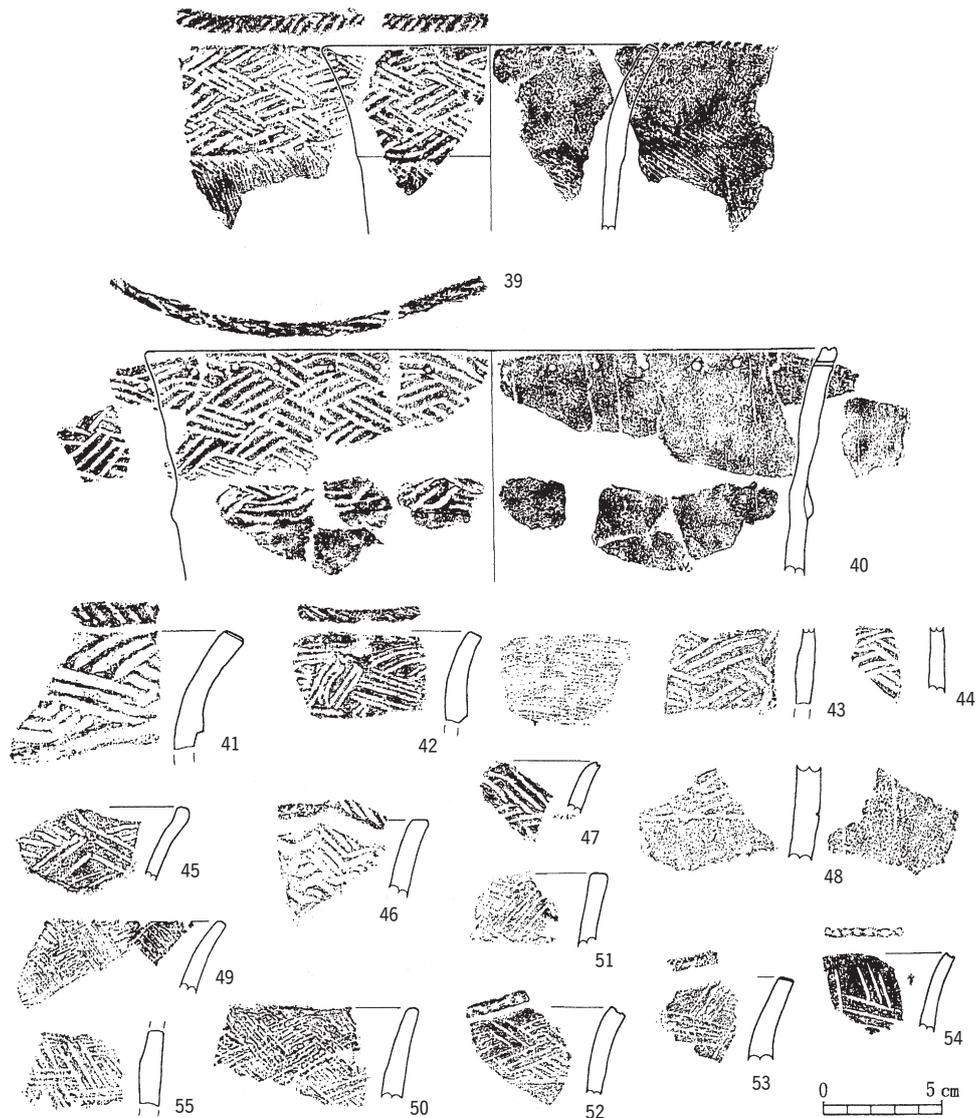
出土資料は，鹿児島県立埋蔵文化財センターと笠利町歴史民俗資料館に保管されている。

**参考文献**

鹿児島県教育委員会1988「下山田Ⅱ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』45

笠利町教育委員会1991「万屋下山田遺跡」『笠利町文化財報告』13

(中山清美)



第3図 出土遺物